

仙台市文化財調査報告書 第206集

仙 台 市
中 田 南 遺 跡

——第2次調査報告書——

1995年7月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙 台 市
中 田 南 遺 跡

——第2次調査報告書——

1995年7月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、誠に感謝にたえません。本市の南東部に位置する太白区中田地区は、以前は豊かな田園風景が広がり、おもに近郊農業が営まれてきました。しかし、近年の急速な市街化に伴い、仙台市のベッドタウンとして新しく生まれ変わりつつあります。

この度の中田南遺跡の発掘調査は、平成4年の第1次調査に続く第2次調査にあたり、同じく宅地造成に伴って実施されたものです。前回の調査では、古代の大規模な集落跡や中世の屋敷跡などが発見され、当時の人々の生活を解明するうえで、貴重な成果が得られました。今回の調査でも、平安時代の墓跡や中世の井戸跡などが発見され、それぞれの時代の集落の範囲や生産域などがさらに広がることが明らかにされました。

本書は、このような調査成果を収録したものであります。その内容が今後の当地域の歴史を考える上で役立つところがあれば幸いです。

本市には重要な文化財が数多くあります。先人の残した貴重な文化遺産を次の世代へ継承していくことは、現代に生きる私たちの重要な責務であります。今後とも、文化財保護への深いご理解とご協力をお願い申し上げます。最後になりましたが、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大のご指導、ご協力をいただきました多くの方々に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成7年7月

仙台市教育委員会

教育長 坪山繁

例　　言

1. 本書は、宅地造成に伴う宮城県仙台市中田南遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。(中田南遺跡については、平成4年(1992年)の調査を第一次調査とし、今回の調査を第二次調査とする。)
2. 報告書の作成および編集は、三塚 靖・太田昭夫が行った。
3. 第VII章の分析結果には、木製品の樹種同定結果を掲載した。
4. 発掘調査および資料の整理に際し、次の方々から多くの指導・助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(順不同・敬称略)
高橋利彦・蟹澤聰史・三辻利一・松本秀明
5. 石製品の材質の鑑定は東北大学理学部の蟹澤聰史氏にお願いした。
6. 調査・整理に関する諸記録および出土遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本報告書の土色については、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1976)を使用した。
2. 建設省国土地理院発行の地形図を使用したものは、図中に示した。
3. 本文中使用の「灰白色火山灰」(庄子・山田:1980)の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている。(白鳥:1980)
4. 図中および本文中使用の方位の北(N)は、すべて真北である。なお、グリッドの南北ラインは真北に対して、 15.5° 東に偏っている。
5. 本書の遺構については、検出順に番号を付し、次の略号も必要に応じて使用した。
井戸跡-S E、土坑-S K、溝跡-S D
6. 本書の出土遺物の登録に際しては、次の略号を使用した。
縄文土器-A、弥生土器-B、陶器-I、銅製品-N、木製品-L、石製品-K、灰釉陶器-灰
7. 遺物観察表内の計測値で、土器に関して、その復元値が不明な場合は-を付した。その他の遺物のカッコ内の値は残存値である。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
I. 調査に至る経過	1
II. 調査要項	1
III. 遺跡の位置と環境	2
IV. 調査の方法と概要	5
V. 基本層序	6
VI. 発見された遺構と出土遺物	7
1. 柱穴列とピット群	7
2. 井戸跡	8
3. 土坑	15
4. 溝跡	15
5. 小溝状遺構群	17
6. その他の遺物	18
VII. 分析結果（樹種同定）	22
VIII.まとめ	24
引用参考文献	25
写真図版	27

I. 調査に至る経過

今回の調査は、この地区一帯の宅地造成の変更に伴うもので、平成6年5月19日に提出された開発行為変更事前協議が話し合いのスタートラインであった。既に平成6年度の事業がスタートしており、その予定も満杯であったことから、調査は平成7年度としていたが、面積が大きないことや一昨年度の調査によって、遺構、遺物密度が小さいことが予測される地点だったので、出来れば年度内に実施したいとも考えていたところであった。

文化庁への届出は平成6年6月17日付で提出された。

8月までは晴天が続き、各現場は予定より早めに調査は進んだが9月に大雨が続き、急に現場の進行が足ぶみしたので、ギリギリまで年度内調査が出来るかの判断が遅れた。協議の結果、12月早々に現場開始することになり、平成6年11月22日付で業務委託契約を結んだ。年末の調査になったので、報告書刊行については平成7年度の契約で行うこととした。

II. 調査要項

(1) 遺跡名：中田南遺跡（宮城県遺跡登録番号01272 仙台市文化財登録番号C-212）

(2) 所在地：仙台市太白区中田七丁目225-1

(3) 調査主体：仙台市教育委員会

(4) 調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員：太田昭夫・三塚 靖

(5) 調査期間：野外調査 平成6年12月1日～平成6年12月22日

室内整理 平成7年1月5日～平成7年3月24日

(6) 調査対象面積：260m²

(7) 調査面積：約210m²

A区 58.5m² B区 151.25m²

(8) 発掘調査参加者

<野外調査> 仙間淳子 植野幸子 太田君子 佐々木瑞枝 佐藤とき子 菅井清子 丹野正彦

芳賀節子 松野順子 我妻美代子

<室内整理> 植野幸子 太田君子 菅井清子 佐々木瑞枝

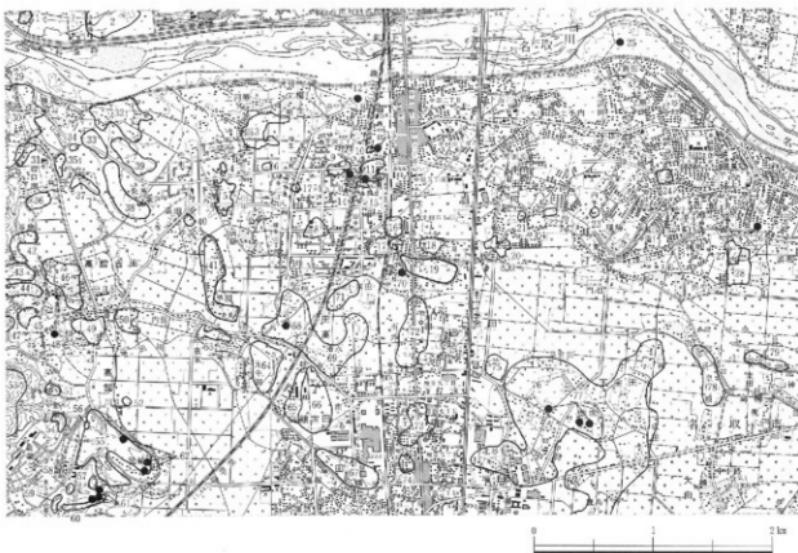
III. 遺跡の位置と環境

遺跡の位置：中田南遺跡は、宮城県仙台市太白区中田七丁目に所在する。そこは、仙台市の南東部にあり、その中でも、最南端に位置する。遺跡のすぐ南には、名取市が隣接する。県庁や仙台市役所のある中心部からは南に約9kmの地点であり、旧国道四号線が遺跡内を縦断している。今回の調査対象箇所は、遺跡の北東部にあたり、中田七丁目225-1外番地にある。

地理的環境：中田南遺跡の位置する仙台市の南東部周辺の地形を概観すると、丘陵・台地・低地に三分される。そして、これらの中を名取川・広瀬川が南東方向に流下し、仙台湾に注いでいる。丘陵は、標高100~500m前後の陸前丘陵と総称される丘陵群の一部であり、台地は、河川に沿う河岸段丘の分布域である。低地は、主として、名取川・広瀬川などの下流域に広く分布しており、宮城野海岸平野と呼ばれている。標高は20m未満で、自然堤防をはじめ、旧河道や後背湿地が複雑に分布し、また、海岸線付近では、浜堤や砂浜海岸などが分布している。中田南遺跡は、こうした海岸平野と呼ばれる低地にあり、名取川下流域の南岸部に形成された自然堤防上に立地している。この自然堤防と周囲の旧河道・後背湿地との比高差は約1mである。遺跡の南側を走行する旧河道は、現状でも幅20m程の帶状の凹地として残存しており、旧河道上には、「堀堀」と呼ばれる水路が走っている。この付近では、この水路の中心線が、現在、仙台市と名取市との市境になっている。

今回の調査対象箇所は、以前から、水田・畠地・岸田などの農地として利用されてきた。調査区の西側には、旧国道四号線、東側には、国道四号線（仙台バイパス）が走っている。中田地区の農地は徐々に都市化の影響を受け、住宅地や商業地へと変化しつつある。

歴史的環境：中田南遺跡の位置する名取川下流域は、県内では最も遺跡の多いところであり、古くから人類の生活が営まれてきた地域でもある。ここでは、名取川下流域の南岸部を中心に述べる。仙台市南西部の全体的な歴史的環境についての詳細は、中田南遺跡第1次調査報告書（太田：1994）を参照されたい。旧石器時代の遺跡としては西野田遺跡などが知られており、これらは台地および丘陵上に立地している。縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡や金剛寺貝塚などが知られており、旧石器時代と同様に遺跡の多くは台地および丘陵上に立地している。低地に立地する遺跡が増加するのは、弥生時代以降であり、弥生時代の遺跡としては安久東遺跡・清水遺跡・後河原遺跡などが知られている。古墳時代に入ると、現海岸線に近い地域まで遺跡の分布が広がり、安定した土地条件が成立するとともに、技術的進歩の様子が伺われる。この時代の遺跡として、安久東遺跡・戸内遺跡・栗遺跡・清水遺跡などが知られており、これらは低地に立地している。安久東遺跡・戸内遺跡では、前期の堅穴住居跡や方形周溝墓が発見されており、また、栗遺跡では後期の堅穴住居跡が多数発見されている。前期の古墳としては、天神塚古墳が、中期の古墳としては、毘沙門堂古墳や、経ノ塚古墳が、後期の古墳としては、安久譲訪古墳などが知られている。奈良・平安時代の遺跡としては安久東遺跡・清水遺跡・中田畠中遺跡などが知られており、いずれも低地に立地している。清水遺跡では、住居跡などに真北方向に対する指向性が強くなる傾向がみられ、条里制との関連を考えられている。また、中田畠中遺跡では、1辺が1.3mという一般集落とは異なる大きさの掘り方をもつ掘立柱建物跡が4棟発見されている。鎌倉・室町時代の遺跡としては、自然堤防上に立地する前田館跡・四郎丸館跡・松木遺跡・安久東遺跡などが知られており、松木遺跡や安久東遺跡では掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などが発見され、豊富な遺物が出土している。また、安久東遺跡では、大規模な溝の存在から、前田館跡との関連が指摘され、前田氏の屋敷跡の可能性が考えられている。また、中世の板碑が数多く分布することも、中田南遺跡周辺の地域の特徴であり、主に鎌倉時代中頃から室町時代中頃にかけて造立された板碑が、柳生地区では36基、名取市では400基以上が確認されている。



(国土地理院1/25,000「仙台市南選定」を参考)

遺跡地名表

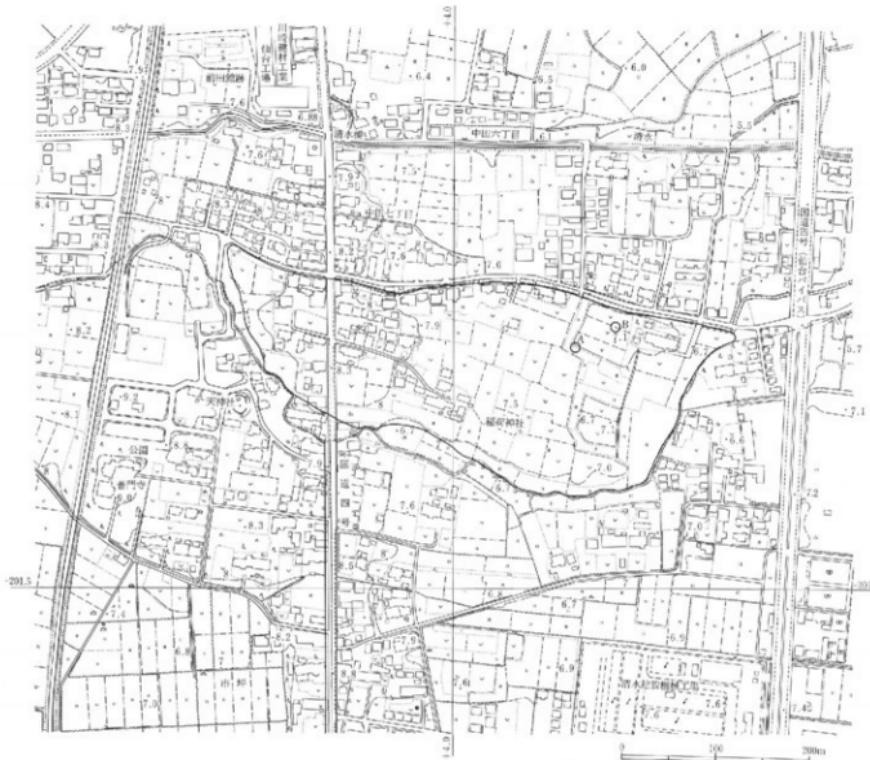
No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	麻生市西	自然堤防	桑良～平安	41	北青垂羽	自然堤防	桑良～平安
2	六木松	自然堤防	桑良～平安	42	鹿野	丘陵地	繩文
3	桃木	自然堤防	桑良～平安・中世・近世	43	那波地村前城跡	丘陵	中世
4	雷	自然堤防	平安	44	東真坂	丘陵	繩文(中期)・桑良～平安
5	鶴場	自然堤防	古墳・桑良～平安	45	東坂	砂礫堆	桑良(中期)・後期・多賀(中期)・大須・桑良～平安
6	翁原	自然堤防	平安	46	鹿野東	砂礫堆	翁文・桑生・古瀬・桑良～平安
7	谷地田	自然堤防	古墳・桑良～平安	47	川上大築跡	丘陵	中世
8	風	自然堤防	海生・古瀬・桑良・平安	48	西大塚古墳	砂礫堆	古墳(後期)
9	安久	自然堤防	桑良・平安	49	川上	砂礫堆	翁文(後期)・佐良(中期)・桑良・平安・中世
10	中田柳沢社裏	自然堤防	西瀬・平安	50	内堀	自然堤防	桑良～平安
11	安久東	自然堤防	海生・古瀬・桑良・平安・近世	51	米光田	丘陵	繩文(前期)・桑良～平安
12	伊佐野櫻坂内古墳	自然堤防	心臓	52	八反田	後背溝地	翁生
13	安久御沙古墳	自然堤防	石浦	53	桑島面跡	丘陵	中世
14	安久御沙古墳	自然堤防	石浦	54	金剛山貝塚	丘陵	繩文(前期)・後期・翁期
15	安久山古墳	自然堤防	翁生	55	今宿	丘陵	翁文(後期)・翁生・翁瀬・翁良・翁・翁・翁・翁
16	伊田塚跡	自然堤防	中世	56	今野野貝塚	丘陵	繩文(前期)
17	鹽原	自然堤防	翁自一・平安	57	南浦	丘陵地帯	翁風・平安
18	芝	自然堤防	桑良～平安	58	新谷	丘陵	翁良・平安
19	中田南	自然堤防	繩文・桑生・古瀬・桑良・平安・中世	59	東野櫻木跡	丘陵地帯	翁良・平安
20	後尻原	自然堤防	海生・翁生・平安・中世・近世	60	北野櫻木跡	丘陵地帯	翁良・平安
21	新田中	自然堤防	古墳・桑良～平安	61	東浦古墳群	丘陵	翁痕(後期)
22	利光丸	自然堤防	古墳・桑良～平安	62	東浦古墳群	丘陵	翁痕(中期)
23	内子	自然堤防	桑良・平安	63	東内塙	自然起防	翁痕(後期)・翁良～平安
24	中田沼中	自然堤防	古墳・桑良～平安	64	元中田	自然起防	翁生・古瀬・合良・平安
25	大原山古墳	自然堤防	古墳	65	野来	自然堤防	翁生・翁良～平安
26	越丸古墳	自然堤防	古墳	66	櫻	自然堤防	繩文・翁生・古瀬・翁良～平安
27	戸ノ内1	自然堤防	翁生・古瀬・桑良～平安・中世	67	八幡	自然堤防	古墳(後期)・翁良～平安
28	戸ノ内2	自然堤防	中世	68	清水古墳	自然堤防	翁
29	戸口上	段丘	古瀬・翁良～平安	69	清水	自然堤防	翁・古瀬・翁良・平安
30	熊野宮古社雷跡	沖積地	中世	70	八神古墳	自然堤防	古瀬
31	翁口下	冲积地	古墳・翁良・平安	71	西田	自然堤防	翁良～平安
32	八ツ口	自然堤防	翁良～平安・中世	72	上久田	自然堤防	翁良～平安
33	豐台上	自然堤防	翁良～平安	73	沢目	沢原	翁生・古瀬・翁良～平安
34	十子下	自然堤防	翁良～平安	74	下田高塗	自然堤防	翁良～平安
35	翁口中	断続地	古瀬・翁良～平安	75	八音寺屋敷跡	自然堤防	中世
36	翁口南	断續地	古瀬・翁良～平安	76	下余田	自然堤防	古墳(中期)・翁良～平安
37	翁口中	自然堤防	翁良～平安	77	無原・猪崎	自然堤防	古瀬(後期)
38	翁原	自然堤防	翁生・古瀬・翁良～平安	78	星原古墳	自然堤防	翁良～平安
39	翁北	自然堤防	翁良～平安	79	中北原	自然堤防	翁良～平安
40	翁田	自然堤防	翁良末～平安				

第1図 周辺の遺跡（中田南遺跡は19）

IV. 調査の方法と概要

遺跡の概要：今回の調査は、2次調査にあたる。ここでは、第1次調査の概要についてまとめてみたい。中田南遺跡の第1次調査は、当時登録されていた中田南遺跡内の宅地造成工事に伴う事前調査として平成4年4月14日から平成5年1月19日まで行われた。

約6,900m²が調査され、調査区のほぼ全域で古代から中世にわたる各種の遺構・遺物が多数発見された。古墳時代中期の遺構としては、土坑1基が検出され、その中から土師器が出土しており、小規模な集落の存在の可能性が考えられている。古墳時代後期の遺構としては、堅穴住居跡3軒などが検出され、その中から土師器・土鉢・鉄製品などが出土しており、これらの敷戸の堅穴住居跡により、集落が構成されていたことが考えられている。古墳時代末から奈良時代前半の遺構としては、堅穴住居跡23軒、掘立柱建物跡2棟などが検出され、その中から土師器・須恵器・鉄製品などが多数出土している。この時期の遺構群の性格としては、公的な組織との関連で出現した計画的大集落と考えられており、またその居住者としては、地方官衙に密接な関係をもつ在地有力者層が想定されている。



第2図 遺跡の範囲と今回の調査地点 (仙台都市計画図 1/2,500 をトレース・縮小)

平安時代前半の遺構としては堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが検出され、その中から、土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・鉄製品などが出土している。この時期の遺構群の性格としては、地方官衙と関わりをもった在地有力者層の集落が想定されている。鎌倉時代の遺構としては、堅穴遺構・井戸跡・溝跡などが検出され、その中からは、陶器・磁器・木製品などが出土している。それらの遺構については村落内の有力な農民層か土豪層の屋敷跡と位置づけられている。室町時代の遺構は、2つの時期から成っている。それぞれ、井戸状遺構・掘立柱建物跡・井戸跡・堀跡・溝跡が検出されており、陶器・磁器・石製品・古錢・木製品などが出土している。各時期とも、その遺構群の性格としては、堀で囲まれた村落内の有力農民層の屋敷跡と考えられている。

今回の調査では、前述したこれまでの調査知見に基づき、集落及び生産域の広がりを確認することを主なねらいとした。

調査の方法： 今回の調査対象面積は約260m²で、この中に幅員4m道路が東西に2本設定される計画であった。この2本の道路は1次調査の調査範囲内にあるため、1次調査のグリッド基準線をそのまま使用した。東側の南北方向の道路（1次調査VII区）の中心線を仮の基準線とし、その道路とほぼ直行する6m道路（1次調査V区）の中心線との交点を東西方向の基準線N-0-Sとした。そして、実際の南北方向の基準線は、仮の基準線より100m西に移動し、W-0-Eとした。この2本の軸線を基準として調査区全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点から東西・南北方向の距離数で表わすことにした。調査区は、南側をA区、北側をB区とした。検出された遺構は、A・B区とも基準杭を中心に全面に水糸で1mメッシュを組み、それらを基準線として、作図した。実測図には、遺構平面図と遺構断面図があり、縮尺は1/20を基準とし、細部の表現が必要な場合には1/10とした。

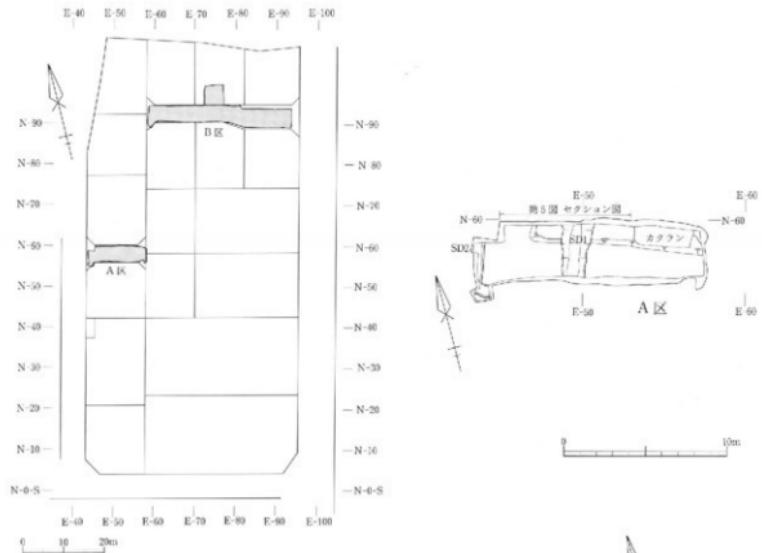
調査の概要： 調査は、平成6年12月1日から、調査員2名、スタッフ10名の体制で開始した。重機により、盛土やI・II層の除去を行ない、その後、III層から遺構確認作業に移行した。A区では、III層は確認されなかった。B区ではIII層が全面に分布しており、そのIII層上面での遺構確認に努めたが、最終的にはIII層直下の黄褐色土層(IV層)上面で、遺構の確認を行った。A区では溝跡が確認され、B区では、一面に小溝状遺構群と多数のビットが確認された。1次調査では、B区の東側のVII区において多数の小溝状遺構が検出されており、B区の小溝状遺構は、これらと関連があるものと思われた。

A区の遺構確認後、調査区に正式な基準杭を設け、A区の精査を開始し、A区調査終了後、B区も同様に調査を進めた。A区、B区とも検出された遺構は、次の通りである。

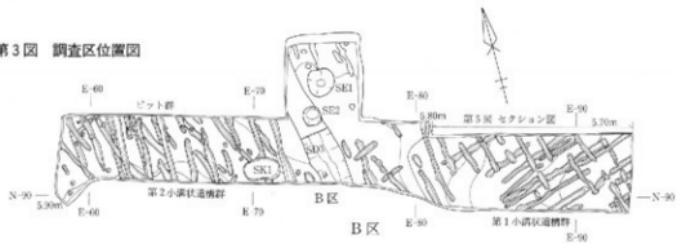
A区：溝跡2条

B区：柱穴列1条・ビット群1群・井戸跡2基・土坑1基・溝跡1条・小溝状遺構群2群

これらの中で、ビットと小溝状遺構群については、平面的なまとまりを群としてとらえている。柱穴については、調査中に組み合うビットの検討を行ない、堆積土の状況、ビット間隔などから、一条の柱穴列を把えた。B区の精査と併行して、IV層以下の下層調査、基本層序の断面図作成などを行ない、12月22日に一切の調査を終了した。



第3図 調査区位置図



第4図 A区・B区遺構配置図

V. 基本層序

今回の調査対象面積は約260m²で、全域が自然堤防上に立地している。A・B区とも、1次調査の基本層序と共通していることから、1次調査の基本層序と同じ層名にした。

【I層】：最近までの耕作土である。主に、暗褐色(10Y R3/3)のシルト及び粘土で構成される層で、層厚は10~30cmであり、層中からは、各時代の遺物が出土している。

【II層】：主に暗褐色(10Y R3/3)のシルト及び粘土で構成され、層厚は10cm前後、厚い箇所で20cmであり、途中で切れる箇所もあった。

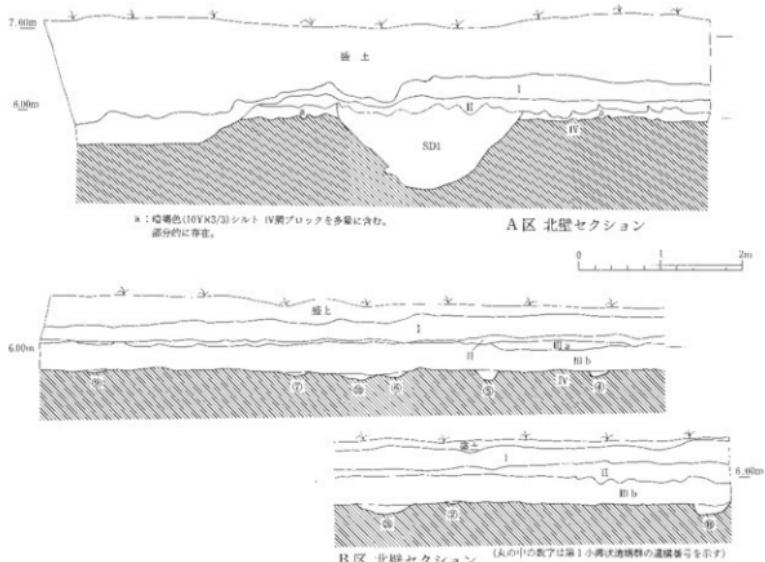
【IIIa層】：主に暗褐色(10Y R3/3)のシルト及び砂質シルトで構成される層で、層厚は10cm前後で部分的に分布する。中世に属する遺構の中で、この層上面から掘り込まれている例が確認されており、1次調査でも同様の例が確

認された。

【III b層】：主に暗褐色(10YR3/2)のシルト及び砂質シルトで構成される層で、層厚は30~40cmで、A区では確認されなかった。

【IV層】：主に褐色(10YR4/4)の粘土質シルトで構成される層である。また、IV層以下の層序については、IV層の細分層として把えた。IV層については標高3.87mまで掘り下げて特徴を把握した。その結果、細分層として5層(a ~ e層)を確認することができた。層厚はそれぞれ異っており、大まかに把えると、砂・シルト・粘土の互層となっている。a層はシルト質粘土層で、厚さ約5cmの帯状の酸化鉄斑紋の集積が層中にみられた。標高4.60m前後のc層から下層ではグライ化が進行する。また、d層は黄灰色の粘土質シルト層であり、層中には植物遺体が少量含まれていた。

上述のI~III層の傾斜は、IV層上面の傾斜と同傾向を示しており、B区では、東端で5.7m、西端で5.9mであり、東側へわずかに傾斜している。最大の比高差は、B区で20cm前後となっている。



第5図 基本層序

VI 発見された遺構と出土遺物

1. 柱穴列とピット群

B区西半部のIV層上面でピットが多数確認された。なお、B区東半部ではピットが1個確認されたにすぎない。

また、B区西半部では、調査区の北壁寄りにピットが多く、南壁ではその密度が薄れる傾向がうかがわれる。いずれも、小溝状遺構と第3溝跡（SD 3）を切っており、これらよりも新しい。

全部で26個のピットが検出され、その中で柱痕跡が確認されたのは、15個である。ピットは、全体的に規模が小さく、径が17~37cm、深さが13~41cmで、平面形は円形が多い。柱痕跡の平面形は、円形が多く、径9~22cmであった。掘り方の埋土を見ると、いずれも黒褐色で、IV層ブロックを多量に含んでいた。柱痕跡の堆積土は、15個のピットのうち10個は、IV層ブロックを少量含んでいた。IV層ブロックを含まない5個のピットの多くは後述する柱穴列のピットであった。

建物跡は確認されなかったが、その配置から一連のピットと考えられる柱穴列が一列認められた。それは4個のピットからなり、直線状にはば等間隔に並んでいる。柱穴列は、N-93.6°-Eの方向で、長さが4.80mを計る。それぞれの柱間は1.60m前後で、建物の一部か、区画のための柱列と推定される。もし、建物跡の一部であれば、調査区の北側でこれらに組み合うピットが検出される可能性が考えられる。

いずれのピット内からも出土遺物はなかった。

2. 井戸跡

（1）第1井戸跡（SE 1）

【位置】 B区 N-96.1~98.0 E-73.0~75.0

【確認面・重複】 IV層上面で確認され、全体が検出された。壁の中位部分は、崩落により大きく剥落している。小溝状遺構群と重複しており、これよりも新しい。

【平面形・規模】 素掘りの井戸である。平面形はわずかに南北に長いが、ほぼ円形をなしている。規模は長軸1.76m、短軸1.64m、深さは2.24mである。

【堆積土】 9層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。中には炭化物・焼土粒を含む層や、層中に酸化鉄斑紋・マンガン歯が集積する層も確認された。

【壁・底面】 上半部は、外に向かって大きく開いている。下半部は、崩落のため大きく剥落しているが、ほぼ円筒形をなしており、壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦に近く、IV層の細砂の層まで掘り込まれている。

【出土遺物】 堆積土中から35点の遺物が出土した。その中で図示できたのは、陶器7点、土師質土器2点、木製品2点、磨面をもつ鍬7点である。陶器には、常滑の甕の体部破片1点と、在地産とみられる鉢1点、甕3点、壺1点、大甕1点が出土している。土師質土器は、皿1点、鉢1点で、2点とも、調整はロクロナデ（内外面）で、皿の底部切り離しは、回転糸切りによるものである。木製品は、2点とも、つけ木の可能性が考えられるもので、先端に焦痕のあるものである。

（2）第2井戸跡（SE 2）

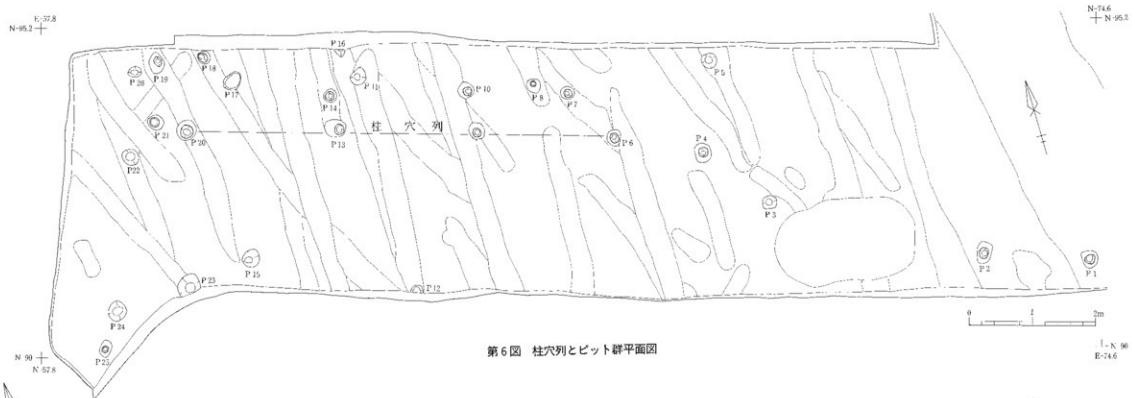
【位置】 B区 N-94.4~95.6 E-73.1~74.2

【確認面・重複】 IV層上面で確認され、全体が検出された。第3溝跡（SD 3）と重複しており、これよりも新しい。

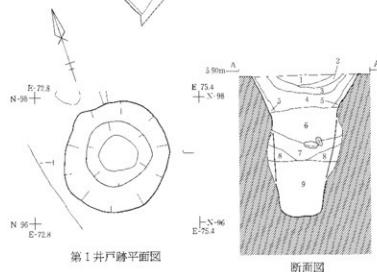
【平面形・規模】 素掘りの井戸である。平面形は、やや南北に長いが、ほぼ円形をなしている。規模は、長軸1.14m、短軸1.00m、深さ1.66mである。

【堆積土】 5層確認された。1層は人為堆積層、2層以下は自然堆積層と考えられる。炭化物を少量含む層も確認された。底面に近づくにつれ、土性は細砂や粗砂を含む層になり、底面付近には5cm程の厚さで粗砂が堆積していた。

【壁・底面】 上部はやや外に向かって開いている。下部は崩落のため剥落しているが、ほぼ円筒形をなしており、壁



第6図 柱穴列とピット群平面図

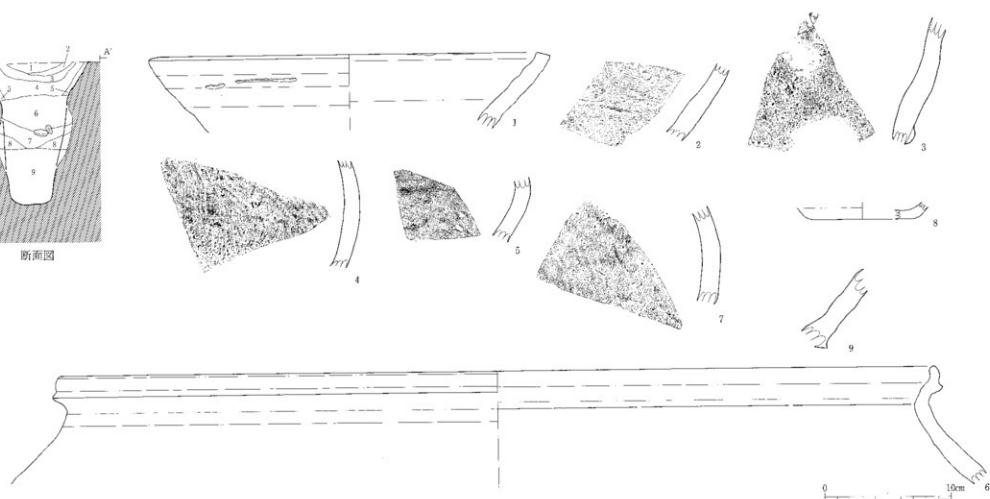


第1井戸跡平面図

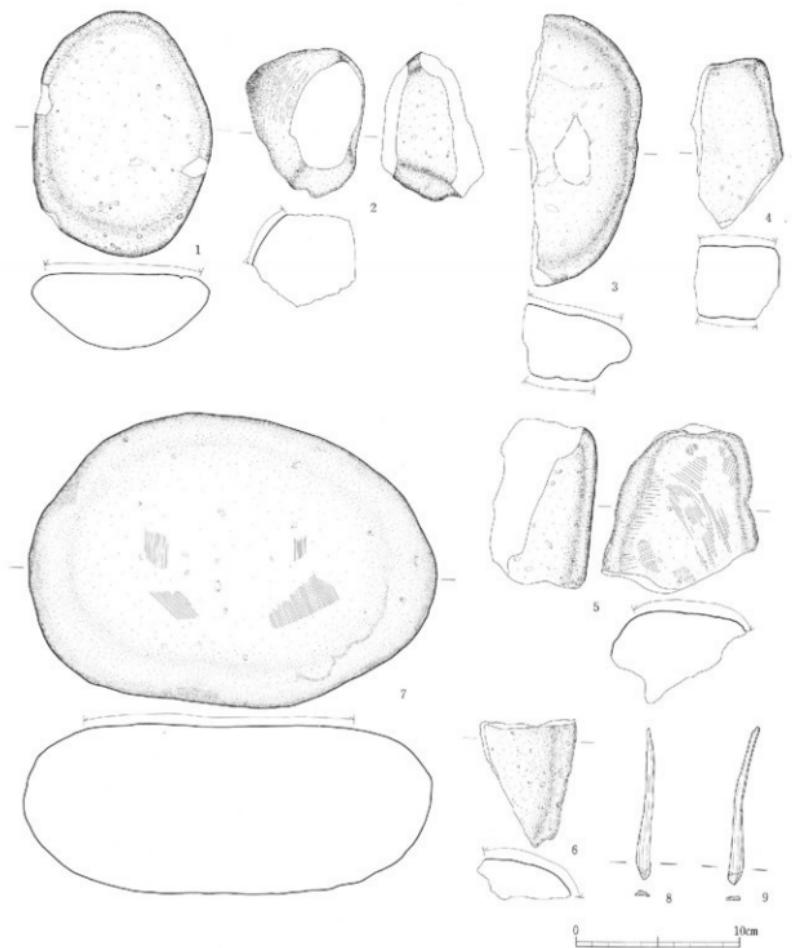
断面図

第7図 第1井戸跡（堆積土）

段号	土	性	付	場	地	しよき	地	性	地	地質記
1	耕層(0.00m/2)	シルト	中ややかさ	あり	泥炭質	根上部・下部小ブロック	根	少	泥炭質	1
2	耕層(0.00m/2)	シルト	やややかさ	ややあら	泥炭質	根全体に分布する	根	少	泥炭質	2
3	耕層(0.33m/2)	シルト	中ややかさ	あり	泥炭質	根全体に分布する	根	少	泥炭質	3
4	耕層(0.00m/2)	シルト	中ややかさ	ややあら	泥炭質	根全体に分布する	根	少	泥炭質	4
5	耕層(0.00m/2)	シルト	中ややかさ	あり	泥炭質	根全体に分布する	根	少	泥炭質	5
6	耕層(0.00m/2)	泥土	中ややかさ	あり	泥炭質	根全体に分布する	根	少	泥炭質	6
7	土	土	中	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし
8	耕層(0.50m/2)	泥土	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
9	土(7.85m/2)	泥土	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし



第7図 第1井戸跡と出土遺物（1）



第8図 第1井戸跡の出土遺物（2）

ピット No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
項目	埋り方	位置	埋り方	位置	埋り方	位置	埋り方	位置	埋り方
形 状	円筒形								
大きさ(cm)	78×74	18×12	34×21	17×15	23×21	30×25	25×35	24×24	25×22
厚さ(cm)	41	16.5	17.5	15.5	17.5	15	19	18	15
地 質	灰褐色 10YR2/3	黄褐色 10YR2/3							

ピット No	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19
項目	埋り方	位置								
形 状	円筒	円筒	板状物	円筒形	円筒	円筒	円筒	円筒	円筒	円筒形
大きさ(cm)	26×26	14×14	25×26	20×(12)	26×25	35×16	21×20	14×14	26×26	17×(12)
厚さ(cm)	不規	17.5	19.5	36.5	34.5	26.5	21	18	32	40
地 質	黄褐色 10YR2/3									

ピット No	P 20	P 21	P 22	P 23	P 24	P 25	P 26
項目	埋り方	位置	埋り方	位置	埋り方	位置	埋り方
形 状	円筒						
大きさ(cm)	32×34	22×21	26×24	12×18	35×74	27×(27)	32×29
厚さ(cm)	21	26.5	10.5	22.5	33	25	27.5
地 質	黄褐色 10YR2/3						

ピット群記表

番 号	種 别	属 位	性 演	產 地	年 代	種 類	量 (kg)			可燃問題	鑑定番号
							口袋	送 空	重 量		
第1回 1	陶器	片	無	無	新石器	縄文	39.8	—	—	11~11	1~2
第2回 2	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~9	1~3
第2回 3	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~9	1~4
第2回 4	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~10	1~5
第2回 5	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~6	1~6
第2回 6	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~4	1~7~8
第2回 7	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	89.0	—	—	11~1	1~9
第2回 8	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~6	1~13
第2回 9	漆器	漆	無	無	新石器	縄文	—	—	—	11~7	1~14

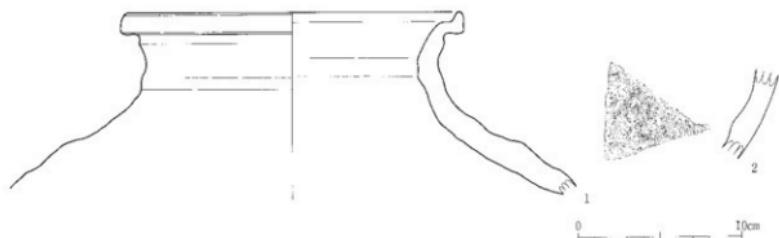
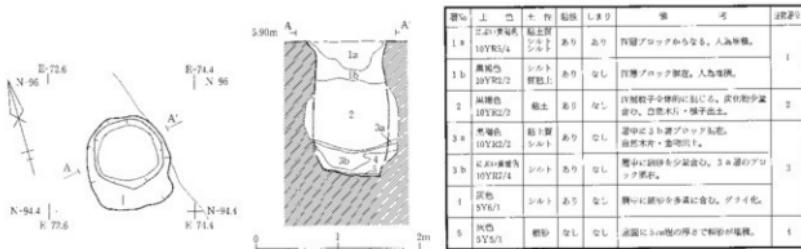
番 号	種 別	属 位	分 類	尺 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 量 (kg)	刃 物	瓦 瓦	多孔質物	鑑定番号
第3回 1	漆器	漆	無	15.6	10.9	4.6	960	漆器	漆器	漆器	K-3
第3回 2	漆器	漆	無	(9.1)	(6.3)	(6.5)	(425)	漆器	漆器	漆器	K-4
第3回 3	漆器	漆	無	16.6	(6.9)	4.6	(356)	漆器	漆器	漆器	K-5
第3回 4	漆器	漆	無	(10.4)	(9.8)	(5.0)	(350)	漆器	漆器	漆器	K-6
第3回 5	漆器	漆	無	(10.5)	(6.6)	(4.4)	(370)	漆器	漆器	漆器	K-7
第3回 6	漆器	漆	無	(7.9)	(3.30)	(2.3)	(160)	漆器	漆器	漆器	K-8
第3回 7	漆器	漆	無	18.1	10.0	10.2	6600	漆器	漆器	漆器	K-9

番 号	種 別	属 位	分 類	尺 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 量 (kg)	刃 物	瓦 瓦	多孔質物	鑑定番号
第3回 8	木製品	つけ木?	光面	15.6	10.9	4.6	93	木製品	木製品	木製品	L-1
第3回 9	木製品	つけ木?	光面	18.1	10.0	10.2	6600	木製品	木製品	木製品	L-2

第1井戸跡出土遺物観察表

は底面から垂直に立ち上がっている。底面は平坦に近く、IV層の粘土層まで掘り込まれている。

【出土遺物】堆積土中から16点の遺物が出土した。その中で図示できたのは陶器2点であり、常滑の壺の口縁部破片と在地とみられる壺である。木製品は、曲物の側板が3点、曲物の底板が1点、不明木製品1点、木材片1点である。



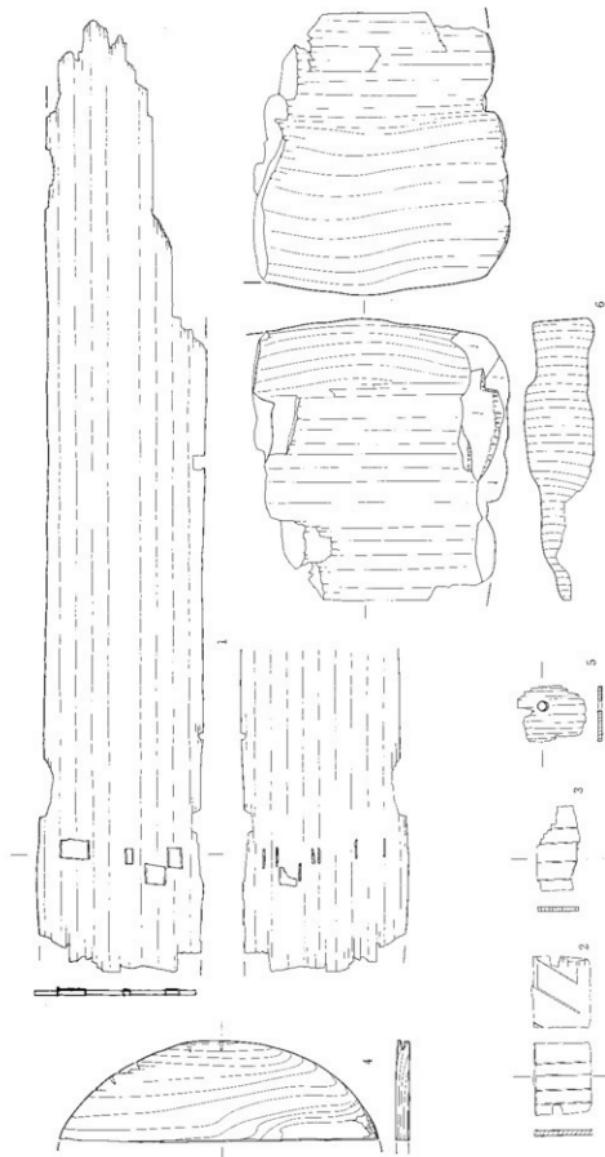
番号	種類	層番	特徴	年代	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定
					方法	結果	結果	結果	結果	結果	結果
1	陶器	Ⅲ・Ⅱ層	素地。内側・外壁(表層)・1段階に無け り手あくあり。口部凹・外壁一ロコロナフ。 本体内部一ミナフ。	宋舟	OC標準 1/3	右端-全体厚 39.4	-	-	11-13	8-10	
2	陶器	表	鉢形。色調一均・外壁(表層)。胎上に細砂を 多く含む。外窓一アズリ。内窓一ナゾ。	左端	中性	全体厚川	-	-	11-12	2-11	

第9図 第2井戸跡と出土遺物（1）

第10図 第2井戸跡の出土遺物（2）



番号	種別	記述	寸法	厚さ	幅	高さ	分類
1	小物	筒状。2層。内側に横溝。上二下側に直溝。一端に口が認められる。	直径6.0 (cm)	0.5	14.4	1.4	器物
2	小物	筒状。2層。内側に横溝。上二下側に直溝。一端に口が認められる。	直径6.0 (cm)	0.5	14.0	1.4	器物
3	小物	筒状。2層。内側に横溝。上二下側に直溝。一端に口が認められる。	直径6.0 (cm)	0.5	14.0	1.4	器物
4	小物	直筒形。2層。内側に横溝。上二下側に直溝。一端に口が認められる。	直径6.0 (cm)	0.5	14.0	1.4	器物
5	小物	筒状。2層。内側に横溝。上二下側に直溝。一端に口が認められる。	直径6.0 (cm)	0.5	14.0	1.4	器物
6	木材	2層。一端は口である。	直径6.0 (cm)	0.5	14.0	1.4	器物



3. 土 坑

(1) 第1土坑 (SK 1)

【位置】 B区 N-91.0~92.4 E 69.4~71.7

【確認面・重複】 IV層上面で確認された。第2小溝状遺構群 (No 2・No 11) と、重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】 平面形は、東西に長い楕円形をなす。長軸方向は、真北方向とほぼ直交し、N-85° -Wである。規模は、長軸が2.24m、短軸が1.30m、深さは14cmである。

【堆積土】 1層認められた。自然堆積層で、IV層小ブロックを多量に含む。少量であるが、炭化物・焼土粒も確認された。

【壁・底面】 断面は皿状をなし、底面は起伏が著しい。壁は、底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】 出土していない。

4. 溝 跡

(1) 第1溝跡 (SD 1)

【位置】 A区 N 56.4~59.8 E-48.6~50.7

【確認面・重複】 IV層上面で確認されたが、断面観察により、IV層上面に部分的に存在する暗褐色シルト層から掘り込まれていることがわかった。北と南は、さらに調査区外に延びている。重複はない。

【方向・規模】 ほぼ直線的に走行する。方向は、真北方向よりやや東に寄っており、N-20° -Eである。確認された長さは3.32mで、最大で、上端幅1.96m、下端幅73cm、深さ75.5cmである。

【堆積土】 4層認められ、1・3・4層は自然堆積層、2層は、IV層ブロックが混在する人為堆積層である。1・3・4層はシルト主体の層で、3・4層は壁からの崩落土とみられる層である。2層は粘土およびシルト主体の層で、底面から40cm上位で酸化鉄の斑紋が確認された。

【壁・底面】 断面は「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、途中で不規則な段をもち、その上方で大きく外傾する。底面は、やや起伏が見られるが平坦であり、全体の傾斜はわずかに西から東の方向に下がっている。

【出土遺物】 図示できるものはないが、土師器破片1点、疋2点が出土している。

(2) 第2溝跡 (SD 2)

【位置】 A区 N-54.9~58.9 E-43.2~44.5

【確認面・重複】 IV層上面で確認された。重複はない。

【方向・規模】 ほぼ直線的に南北に走行し、調査区の南壁付近で東の方向に屈曲し、「L」字形をなす。方向は南北方向が真北から東に寄っており、N-21° -Eで、東西方向はそれとほぼ直交し、N-68° -Wである。確認された長さは南北が2.60m、東西が1.00mであり、規模は、最大で上端幅70cm、下端幅56cm、深さ21cmである。

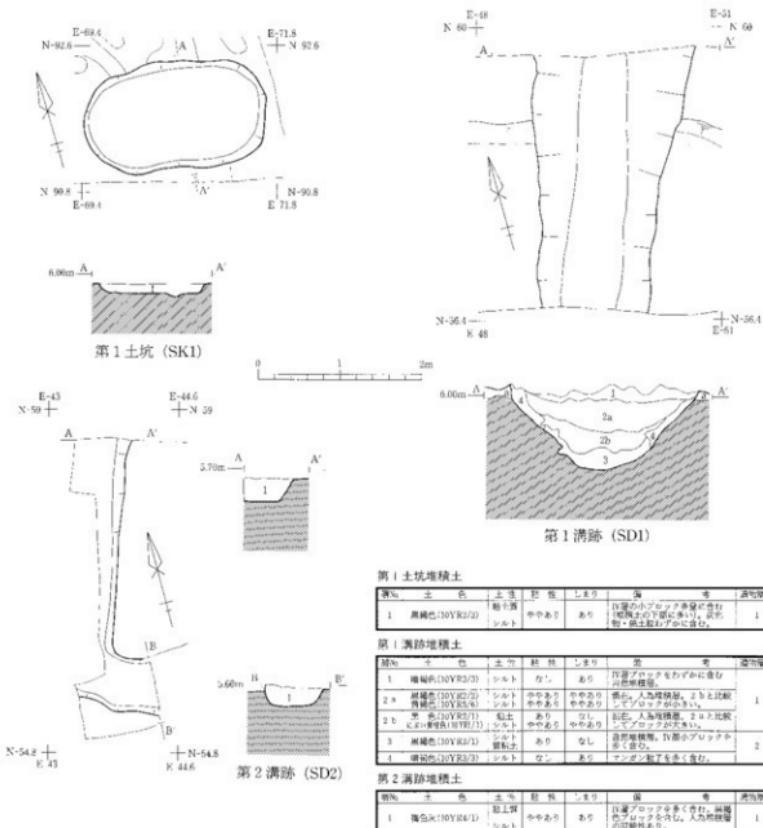
【堆積土】 1層のみ認められた。IV層ブロックを多く含んでおり、人為堆積層の可能性が考えられる。

【壁・底面】 断面は「U」字形か逆台形をなしており、壁は底面からやや角ばって立ち上がり、その上方で外傾する。底面はほぼ平坦であり、全体の傾斜は南から北に下がっている。

【出土遺物】 出土していない。

(3) 第3溝跡 (SD 3)

【位置】 B区 N-90.8~98.8 E-72.0~76.2



第11図 土坑・溝跡

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第2井戸跡(S.E.2)、ピットと重複しており、これらよりも古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行し、方向は真北方向より西に寄っており、N-12°-Wである。確認された長さは8.92mであるが、その南半部のみ完掘した。規模は、最大で上端幅1.93m、下端幅68cm、深さ82cmである。

【堆積土】13層認められ、いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。堆積層は、1～4層はシルト質粘土主体、5～7層は粘土主体、8層以下は粘土および砂の互層である。5層は腐植層を含み、9・10・12層は水成堆積層と考えられる。12・13層は水流による浸食で底面が削られた部分の堆積層の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は下部が逆台形をなしており、壁は底面から急激に立ち上がり、壁中位で屈曲し、その上方は大きく外傾する。底面は、ほぼ平坦であり、全体的な傾斜はわずかに南から北に下がっている。

【出土遺物】図示できたのは、鶴文土器(深鉢)の破片1点のみであるが、図示した遺物の他に、土器破片が数点出土している。

第1 土坑堆積土

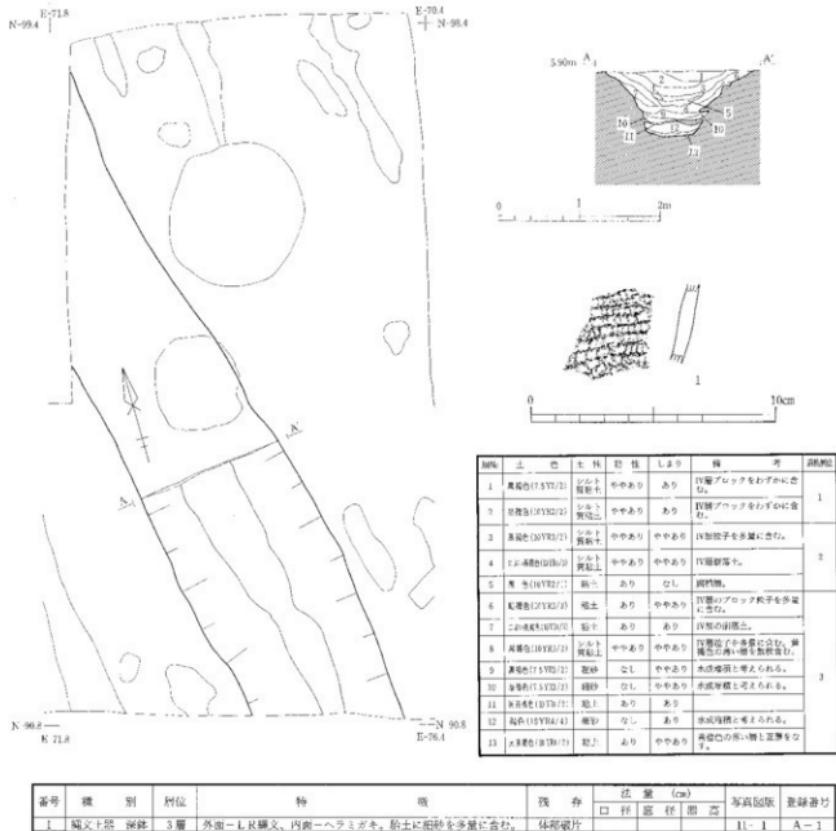
番号	土色	土性	粒度	しまり	層	特徴	層位
1	黒褐色(30YR2/2)	粘土質	細砂質	少々あり	あり	作溝か小ブロック參照と並び 作溝の下部に多い。試料 物・底土層は少く存在。	1

第1 溝跡堆積土

番号	土色	土性	粒度	しまり	層	特徴	層位
1	褐色(10YR2/2)	シルト	砂	あり	IV層アセロラをわずかに含む 川岸堆積物		
2	褐色(10YR5/4)	シルト	砂や砂利	少々あり	褐色・灰色混在。2と比較 シルト・ロクが大きい。	1	
2 b	褐色(10YR2/1)	粘土	砂や砂利	あり	褐色・人為堆積物。2と比較 シルト・ロクが大きい。		
3	黒褐色(30YR2/3)	シルト	砂や砂利	なし	褐色・人為堆積物。IV層小ブロック シルト・ロクが大きい。	2	
4	褐色(10YR2/3)	シルト	砂	あり	アンサンブルを多く含む。		

第2 溝跡堆積土

番号	土色	土性	粒度	しまり	層	特徴	層位
1	褐色(30YR2/1)	粘土質	砂や砂利	あり	IV層アセロラが多く含まれ 川岸堆積物		1



第12図 第3溝跡と出土遺物

5. 小溝状遺構群

(1) 第1小溝状遺構群 (B区東半部)

【位置】 B区 N-89.1~99.4 E-72.1~93.4

【確認面・重複】 IV層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、主に、北・南・東の調査区外にさらに続く。第1井戸跡 (S E 1) と重複しており、これよりも古い。

【方向・規模】 南北6m、東西20m近い範囲から、細長い小溝跡が30条検出された。長さは一様ではないが、どの小溝跡も直線的に走行しており、上端幅は20~30cmが多く、深さは5~10cmがほとんどであった。これらは、平面的な方角や方向性などから、大きく2群に分けることができる。a群は、方向は真北から10~20°西に偏る方向性を示す例が多く、14条ある。溝跡同士の間隔は60~80cmであり、比較的等間隔に並んでいる。このa群とほぼ直交す

る形でb群が展開する。このb群は16条あり、方向は真北から70~80°偏る方向性を示す例が多い。溝同士の間隔は30~80cmであるが、中には重複関係を示す例も認められた。

【堆積土】堆積土はほとんどが1層のみ確認された。大半が黄褐色のシルトで、層中にはIV層ブロック・粒子を多量に含んでいた。

【壁・底面】断面は、皿状か「U」字形をなし、底面には著しい起伏が認められた。

【特記事項】この遺構群は、方向性・形状・堆積土の共通性などから、a・b群それぞれが同時に機能していた可能性が高く、a・b群はそれぞれ、異なるまとまりの一部を示しているものと考えられる。切り合い関係を見ると、b群の大半をa群が切っており、b群の方が古いものと考えられる。なお、西側に走行するSD3はa群の方向性とほぼ一致しており、相互に関連性がうかがわれる。

【出土遺物】出土していない。

(2) 第2小溝状遺構群（B区西半部）

【位置】 B区 N-89.4~94.9 E-58.1~72.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、調査区外にさらに続く。SK1やピット群と重複しており、これらよりも古い。

【方向・規模】南北6m、東西15m近い範囲から、細長い小溝跡が27条検出された。東半部同様、長さは一様ではないが、どの小溝跡も直線的に走行しており、上端幅は20~30cmが多く、深さは3~10cmがほとんどであった。これらは平面的なあり方や方向性、切り合い関係などから、大きく3群に分けることができる。a群は9条あり、方向は真北から0~5°西に偏る方向性を示しており、溝同士の間隔は80cm前後である。b群は、10条あり方向は真北から20~30°西に偏る方向性を示す。溝同士の間隔は1m前後である。c群は6条あり、方向は真北から0~5°西に偏る方向性を示す例が多く、溝同士の間隔は90cm前後であり、その点ではa群と類似している。

【堆積土】全て堆積土は1層であった。ほとんどが暗褐色のシルトで、層中にはIV層ブロック・粒子が多く含まれていた。なお、a群の一部の溝跡の堆積土からは、10C前半に下したと考えられる灰白色火山灰が検出されている。

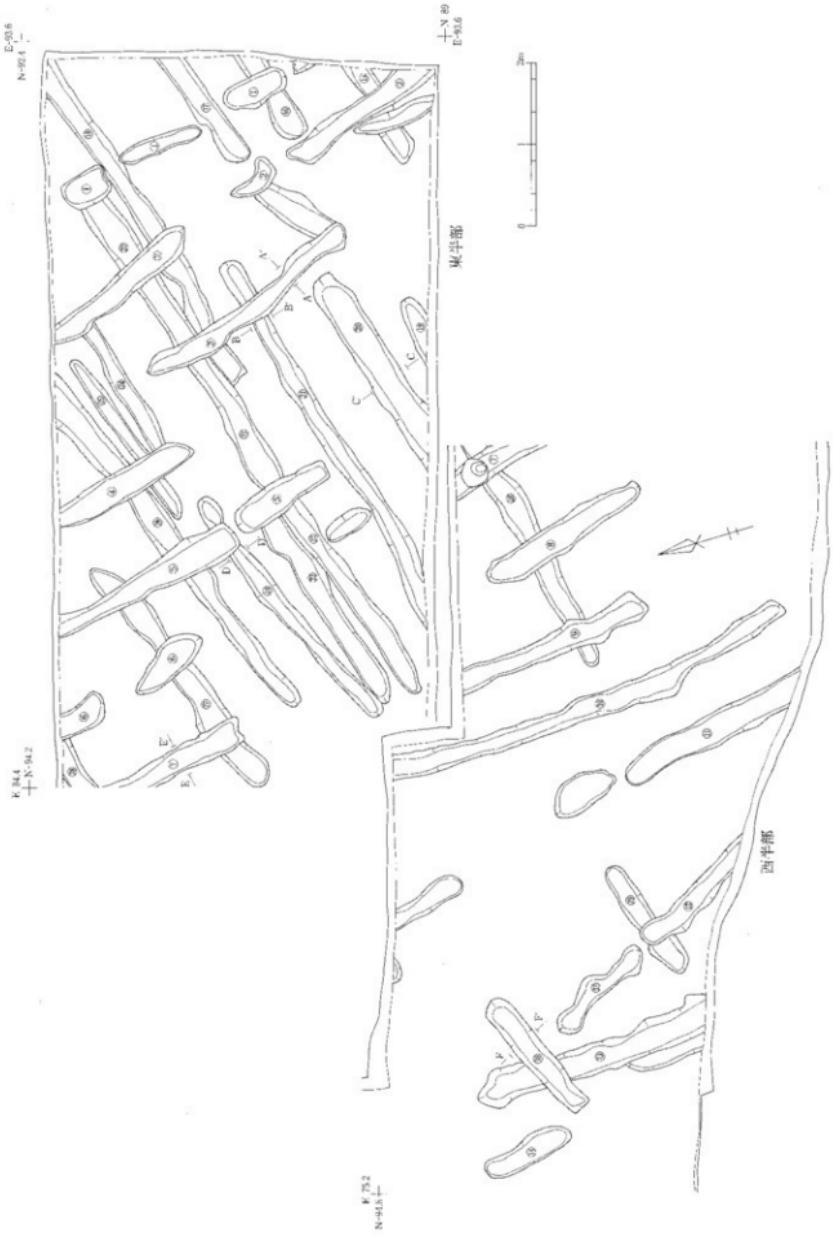
【壁・底面】断面は皿状か「U」字形をなし、底面には顕著に起伏が認められた。なお、一部の溝跡底面では、形状が三日月状で断面が三角形をなす小さな落ち込みが並んで検出された。これは癪先痕と考えられる。

【特記事項】これらの遺構群は、第1小溝状遺構群と同様に、形状・堆積土などが共通しており、方向を同じくするa~c群はそれぞれが同時に機能していた可能性が高く、それぞれ異なるまとまりの一部を示しているものと考えられる。切り合い関係から、a群が一番新しく、次いでb群が新しく、c群が一番古い。

【出土遺物】図示できたのは、堆積土出土の縄文土器破片1点のみである。他に土師器破片が1点出土している。

6. その他の遺物

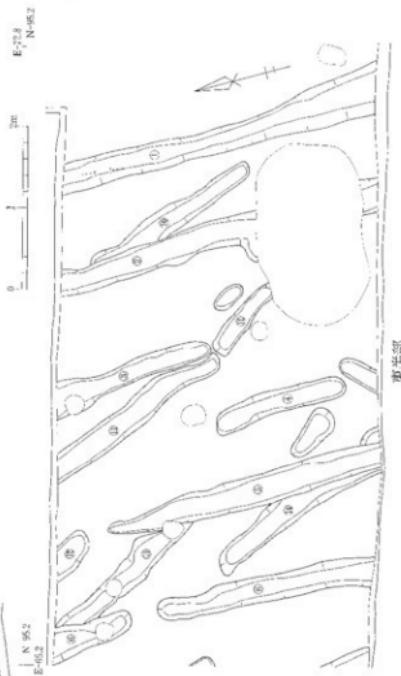
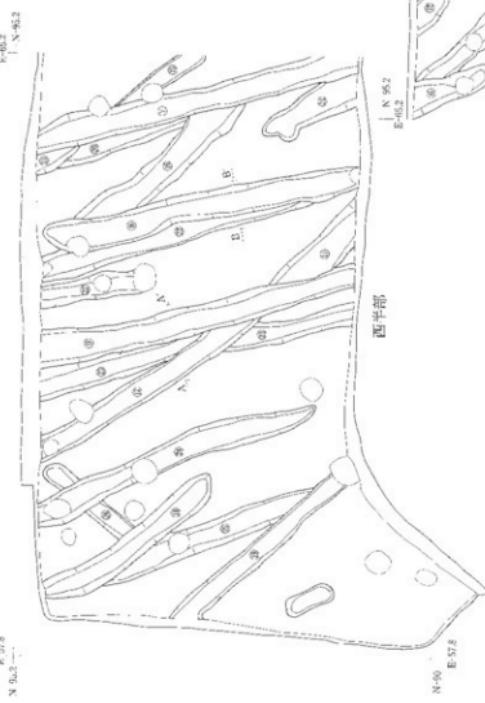
遺構以外の基本層I・II・III層からは若干の遺物が出土しているが、ほとんどが細かな破片資料である。遺物には、縄文土器（1点）・弥生土器（2点）・土師器（22点）・須恵器（6点）・陶器（9点）・磁器（11点）・銅製品（1点）・銅製品（1点）・石器（1点）・礫（2点）・瓦（1点）がある。その中で図示できたのは、A区I層から出土した瀬戸美濃産の折縁鉢口縁部破片1点、相馬産の掛け分け碗底部破片1点、灰釉陶器口縁部破片1点、銅製品1点、A区III層から出土した縄文土器体部破片1点、弥生土器体部破片1点、B区I層から出土した在地産の陶器鉢頸部破片1点、B区II層から出土した磁石1点であった。

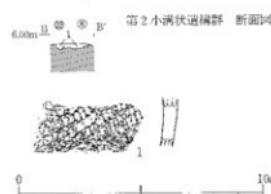
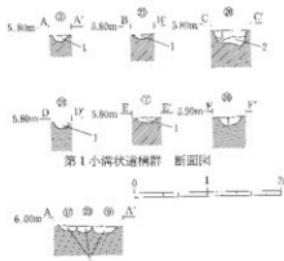


第13图 第1小瓣状遗模群
E-814

第2小消状造構群

N-56.2 E-65.2 N-56.2 E-65.2 N-56.2 E-65.2





第1小溝状遺構群断面図

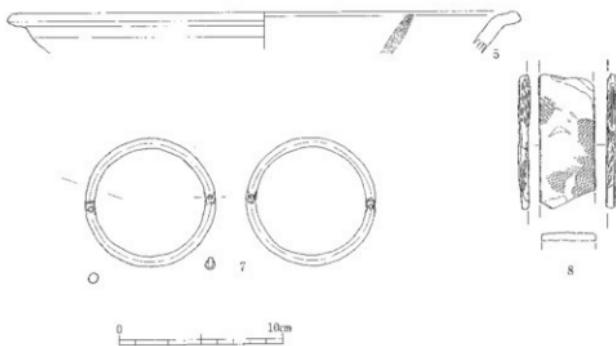
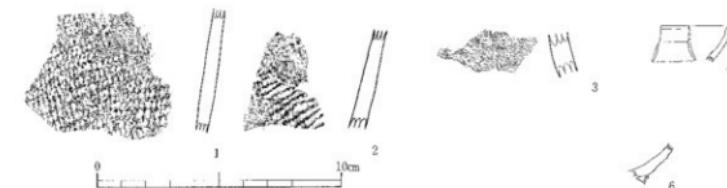
小溝名	場所	土	色	土性	粒径	しまり	備考	遺物種目
③	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロックを上部に多量に含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
④	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	山端ブロック(高麗瓦)を多量に含む。黄褐色と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑤	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を少量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑥	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を少量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑦	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を少量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑧	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を少量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑨	1 黄褐色(±YR5/6)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を少量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	

第2小溝状遺構群断面図

小溝名	場所	土	色	土性	粒径	しまり	備考	遺物種目
⑩	1 黄褐色(±YR5/3)	シルト	なし	あり	田端ブロックを多量に含む。		1	
⑪	1 黄褐色(±YR5/3)	シルト	なし	あり	田端ブロックを少量含む。		1	
⑫	1 黄褐色(±YR5/3)	シルト	なし	あり	田端ブロックを多量に含む。内側が同じ小溝跡と重複する層合が見えてある。		1	
⑬	1 黄褐色(±YR5/4)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を多量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	
⑭	1 黄褐色(±YR5/3)	シルト	なし	あり	田端ブロック(高麗瓦)を多量含む。黄褐色の土と黒褐色の土の層合はよく見えてある。		1	

番号	種別	層位	特	性	残	法	量(cm)	「今」印	堆積区分
1	調査土器 残片	1層	外側一面に溝文、内面一面にガラス。粘土に粗砂を含む。		体部破片	口径 底径 器高	— — —	II-2	A 2

第15図 小溝状遺構群断面図と出土遺物



第16図 1~III層出土遺物

番号	種 別	層位	特 性	残 存	法 量 (cm)			写 真 図 版	ひめ番号			
					口 径	底 径	厚 度					
1	純文上器	表面	外面-I, R鋸文、内面-ミガキ。泥土に細砂を少量に含む。	体部破片	-	-	-	11-3	A-3			
2	堆生土器	裏	外側 L及縫文、内面-ケズリ。胎土に細砂を含む。	体部破片	-	-	-	11-4	B-1			
番号	種 別	層位	特 性	層 地	年 代	残 存	法 量 (cm)					
							口 径	底 径	厚 度			
3	陶器	I層	鉢形。外側-外延(昭和赤)、内面(歩道)。胎土に粗砂を多く含む。外側-ヨコナガ、内面-ヨコナガ。	在地	中世	腹部破片	-	-	-	12-2 I-12		
番号	種 別	層位	外 面	内 面		残 有	法 量 (cm)					
							口 径	底 径	厚 度	写 真 図 版	ひめ番号	
4	灰陶軽器	I層	灰陶。ロクロナガ。色調-灰オーブ。内輪-ロクロナガ。色調-灰オーブ。			口部破片	-	-	-	11-5	H-1	
番号	種 別	層位	特 性	所 地	年 代	残 存	法 量 (cm)			写 真 図 版	ひめ番号	
							11	径	底 径	厚 度		
5	陶器	折縁鉢	I層	内・外側とも灰陶。色調-内・外面(灰白)。内面に鉄鉢底模様あり。	岐阜美濃	17C中頃	i種-1件	30.6	-	-	12-5	I-15
6	陶器	掛け分け鉢	I層	灰陶と鉄鉢の掛け分け。色調-外側(赤褐色)、内面(オーリーブ灰)。行萬糸。	相馬	18C	底部破片	-	-	-	12-3	I-16
番号	種 別	層位	特 性	層 地	年 代	残 存	法 量 (cm)			写 真 図 版	ひめ番号	
							8.1	-	0.6	56	13-7	N-1
番号	種 別	層位	特 性	層 地	年 代	残 存	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	写 真 図 版	ひめ番号
							(8.3)	(3.4)	(0.5)	(30)	石室宝山古 墳複元器	13-6 K-1

I ~ III層の出土遺物観察表

VII. 分析結果

中田南遺跡第2次調査出土材の樹種

木工舎 「ゆい」 高橋 利彦

試料番号	用 途	遺構	種 名
L-1	つけ木?	SE1-6	マツ属複維管束莖属の一種
L-2	つけ木?	SE1-6	マツ属複維管束莖属の一種
L-3	曲物側板	SE2-2	アスナロ
L-4	曲物側板	SE2-3	スギ
L-5	曲物側板	SE2-3	スギ
L-6	曲物底板	SE2-3	スギ
L-7	不明	SE2-2	アスナロ類似種
L-8	材片	SE2-2	アスナロ類似種

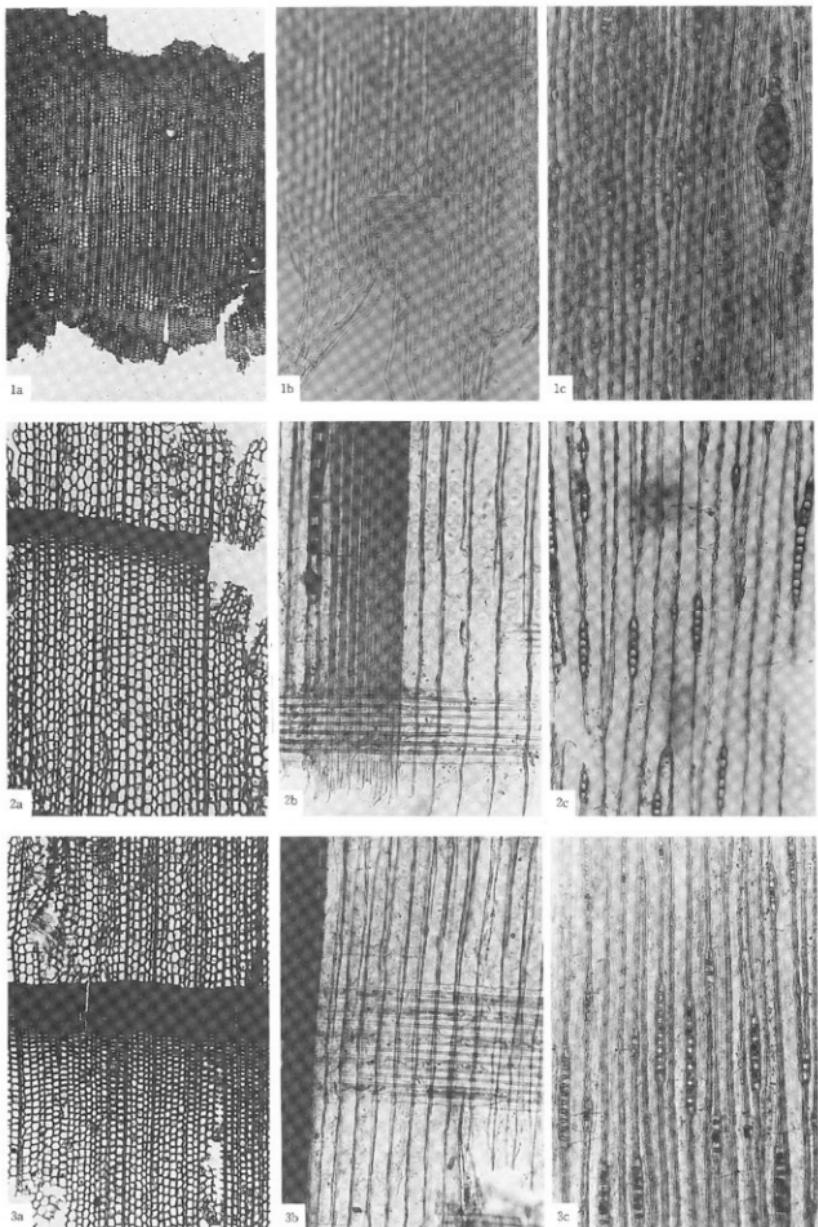
図版 1. マツ属複維管束莖属の一種 L-1

2. スギ L-4

3. アスナロ L-3

a : 木口 x 40 b : 稚目 x 100 c : 板目 x 100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、稚目では左から右へ。



第17図 出土材顕微鏡写真

VIII. まとめ

- 中田南遺跡は名取川下流域の南岸部に形成された自然堤防上に立地しており、主に古代・中世の集落跡として知られている。
- 今回の調査は2次にあたり、2箇所とも調査区は遺跡の北東部に位置する。今回の調査区は1次調査の対象地区内にあり、近辺からは平安時代に属する小溝状遺構群、中世に属する堅穴遺構や井戸跡などが発見されていた。
- 今次の調査ではA区では2条の溝跡が、B区では1条の柱穴列を含むピット群、2基の井戸跡、1基の土坑、1条の溝跡、2群の小溝状遺構群が、それぞれ検出された。また、出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・金属製品・砥石・磨面をもつ礎・木製品などがあるが、図示できたものは極めて少なかった。
- 遺構の中で出土遺物から時期が確定できるものにはB区から検出された井戸跡2基がある。いずれも素掘りの井戸で、基本層IV層を2m前後の砂層か粘土層まで掘削している。第1井戸跡からは在地の白石窯製品とみられる陶器の壺などが堆積土中から出土しており、また、同じく出土している土師質土器皿は1次調査のII 2 B類とされ、13世紀後半頃に位置付けられたものに特徴が近似している。以上からこの井戸跡の時期については大まかに13世紀後半頃に比定されよう。なお、この井戸跡から出土した木製品の中にはつけ木ではないかとしたものが2点ある。これは長さが10cm未満で、細くあまり手の加えられていない木材片を素材としており、その太い方の先端部に焦痕が認められるものである。類例は、中田南遺跡第1次調査の第5号井戸跡でも出土している。今回の資料は、マツ属の一種との樹種同定結果が出ており、今後、民俗事例なども含めて、つけ木かどうかを検討していく。第2井戸跡からは常滑産とみられる壺が堆積土中から出土している。この壺はその口縁端部が上方につまみ上げられる特徴を有するもので、最近の中世常滑焼における中野晴久氏の編年（中野：1994）によると、第二段階の最初の型式である5型式期の広口壺にその形態的特徴が近似する。この5型式期は13世紀前半を中心とした年代が与えられており、このことから第2井戸跡もその年代に近い時期のものと考えられる。これらの2基の井戸跡の西側からは多数のピットが検出された。これらの多くは柱痕跡も確認されており、柱穴と考えられ、その中には組み合った柱穴列も確認された。伴なう遺物がなく、これらの柱穴群の時期については確定できないが、平安時代頃とみられる後述する小溝状遺構群を切っており、それよりは新しい。また、柱穴の特徴が1次調査の中世の掘立柱建物跡の柱穴と共通することなどから、ほぼ中世頃の柱穴群と考えられる。また、井戸跡の付近に分布する点からみれば、いずれかの井戸跡に伴う遺構の可能性も考えられる。
- 1次調査では今回のA区の南および西方において、中世前半頃の遺構が発見されており、陶器や土師質土器皿・木製品などが多く出土している。今回の調査で、さらに遺跡の北東部においても中世前半頃の居住に関わる遺構が確認されたことになり、この時期の居住域の広がりが広範にわたっていたことが明らかになった。
- B区ではほぼ全域から小溝状遺構が検出された。これらはB区中央を南北方向に走る第3溝跡を界して、方向性などから、2群にまとめられた。東半部の第1小溝状遺構群は真北方向から西に10~20°偏した方向性をもつa群と、そのa群とほぼ直交するb群の2つのまとまりがみられる。両群は重複しており、a群がb群より新しい。こうした方向性のあり方は今回のB区の東側で検出されている1次調査の第9号小溝状遺構群のa群・b群と共通しており、その広がりの一部と考えられる。1次調査ではa・b両群が平面的にその分布を異にしていることから、同時に掘り込まれ、機能していた可能性が考えられたが、今回の調査により、複数の重複する遺構群であることが確認された。

西半部の第2小溝状遺構群は3つの重複関係があり、それぞれ、異なる方向性をもつa・b・cの3群にまとめられた。なお、3群とも第1小溝状遺構群とはわずかではあるが、方向性を異にしており、第1・第2両遺構群の

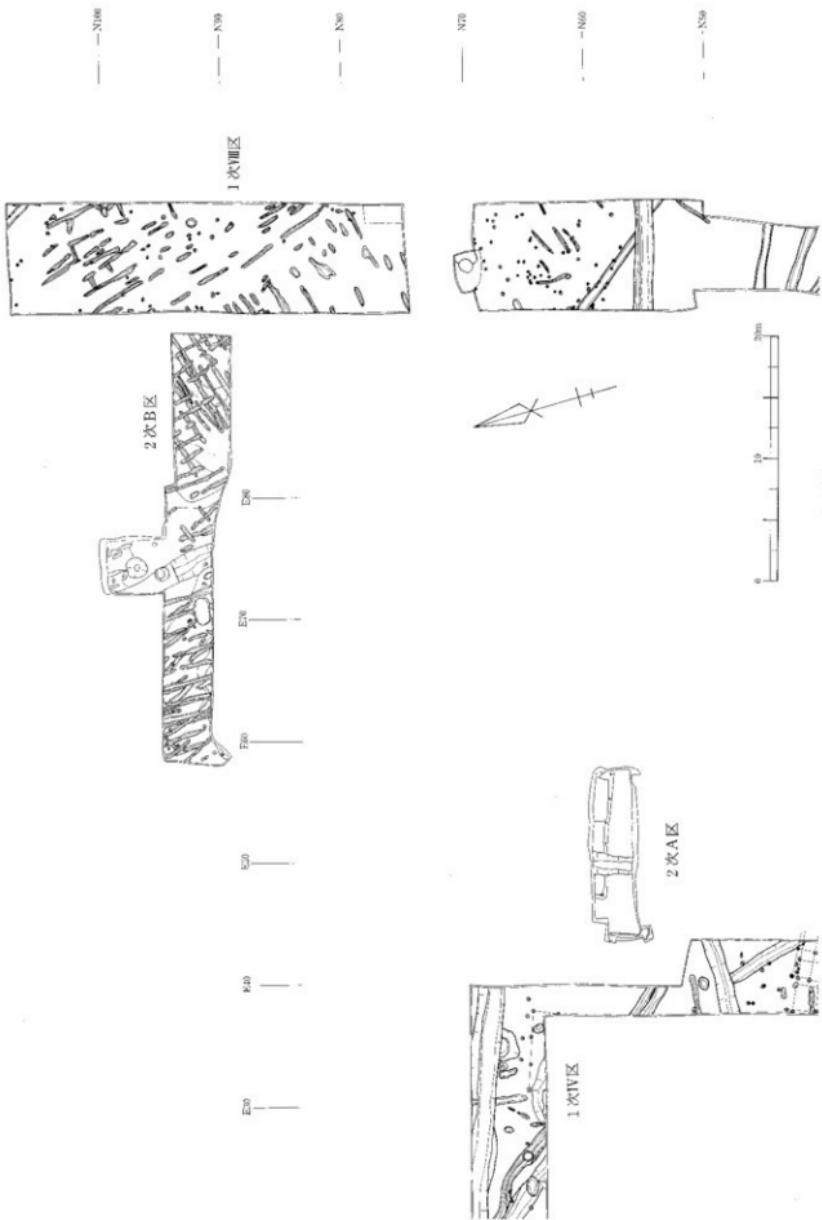
関係については一連のものが存在するかどうかは明らかにはできなかった。ただし、第3溝跡の方向が第1小溝状遺構群のa群とほぼ一致していることや、この溝跡と小溝状遺構群との重複関係がみられないこと、この溝跡を境にして東西の小溝状遺構群に方向性の差異がみられたことなどの平面的なあり方から溝跡および両小溝状遺構群は相互に関連し合う遺構であった可能性もうかがわれる。

これらの小溝状遺構群はいずれも時期を決定できる遺物がなく、時期については明確にはできないが、1次調査の第9号小溝状遺構群が平安時代頃と推定されていること、小溝の一部の堆積土中から10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰が検出されていることなどから、今回の小溝状遺構群についても大まかに平安時代頃に属するものと推定される。こうした小溝状遺構群の性格については、1次調査では畠跡を想定している。1次調査と同様に、今回の調査でも小溝の多くが幅が20~30cmで、深さが5~10cmの規模をもち、堆積土は1層でIV層のブロックが多量に混在する層であり、底面には著しい起伏がみられた。一部の小溝の底面では垂直方向の鋤先痕とみられる痕跡も確認されている。このような特徴から、これらの小溝は深く掘削されて、その後に埋め戻されたものと理解される。同様の特徴をもつ小溝状遺構群は仙台市でも最近その検出例が増加している。その1つである下ノ内浦遺跡では遺存良好的な畠跡が検出されている(佐藤:1993)。この畠跡では耕作土上面では多数の歯が検出され、耕作土下面からは歯とは方向の異なる多数の小溝が検出された。この小溝については「畠耕作に伴う天地返しの痕跡」(前掲文献)とされ、畠の耕作痕と考えられている。中田南遺跡において検出されている小溝状遺構群は下ノ内浦遺跡の小溝群と特徴がほぼ共通することから、畠の耕作に伴って掘り込まれた痕跡と考えられる。

1次調査では平安時代の遺構が調査区のほぼ全域から発見されているが、北東部では居住に関わる遺構はほとんどなく、小溝状遺構群などの生産に関わる遺構の存在が知られている。今回の調査で、さらにつこうした生産域の広がりが確認されることになり、中田南遺跡における平安時代の土地利用のあり方を知る上で重要な知見を得たといえよう。

引用・参考文献

- 太田昭夫 (1994) : 「仙台市中田南遺跡—古代・中世の集落跡の調査」『仙台市文化財調査報告書』第182集
仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 (1993) : 「下ノ内浦遺跡—第4次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第173集
仙台市教育委員会
- 赤羽一郎・中野晴久 (1994) : 「生産地における編年について」「中世常滑焼をおって」資料集 日本福祉大学
知多半島総合研究所
- 白鳥良一 (1980) : 「多賀城跡出土土器の変遷」「研究紀要」VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 庄子貞雄・山田一郎 (1980) : 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」「多賀城跡-昭和54年度調査概報」
宮城県多賀城跡調査研究所
- 小山正忠・竹原秀雄 (1976) : 「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社



第18図 第1・2次断層の遺構分布

写 真 図 版

写真1 中田両道跡周辺の空中写真（昭和36年撮影—国土地理院）





1. A区確認状況
(西から)



2. 第2溝跡確認状況 (背から)



第2溝跡検出状況 (南から)

写真2 A区の遺構 (1)

1. 第1溝跡
確認状況
(南から)



2.



2. 第1溝跡検出状況 (南から)

写真3 A区の遺構 (2)



1. B区東半部
確認状況
(南西から)



2. B区中央部
確認状況
(南から)



3. B区西半部
確認状況
(南西から)

写真4 B区の遺構（1）

1. B区西半部
確認状況
(南から)



2. B区西半部
検出状況
(東から)

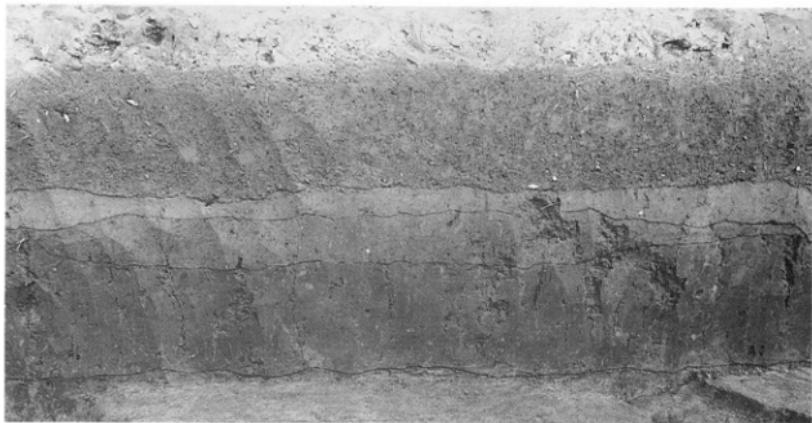


3. ピット群・第2小溝状
遺構群検出状況
(西から)



写真5 B区の遺構（2）

1. 第3溝跡
検出状況
(南から)



2. B区北半部セクション (南から)

写真6 B区の遺構およびセクション

1. 第1井戸跡
検出状況
(南から)



2. 第2井戸跡
検出状況
(南から)



3. 第1土坑
検出状況
(東から)

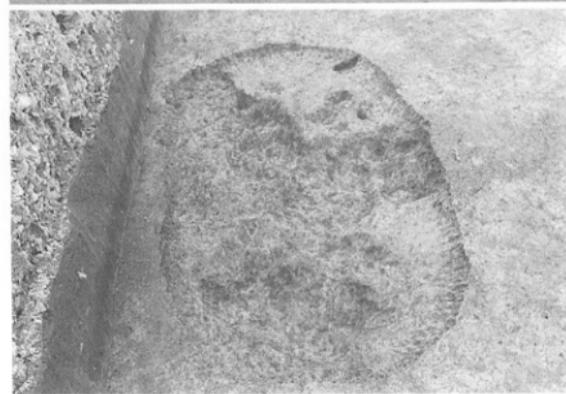
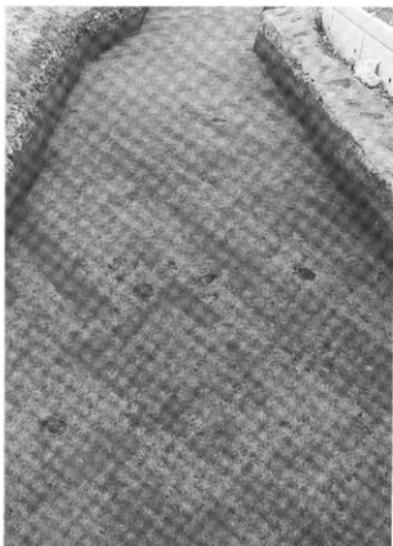


写真7 第1・2井戸跡、第1土坑検出状況



1. 第3溝跡セクション (南から)



2. 第1小溝状遺構群確認状況 (東から)



3. 第1小溝状遺構群検出状況 (東から)

写真8 第3溝跡・第1小溝状遺構群

1. 第1小溝状遺構群
⑩セクション
(西から)



2. 第2小溝状遺構群
⑦⑧⑨セクション
(南から)



3. 第2小溝状遺構群
⑩セクション
(南から)



写真9 第1・2小溝状遺構群セクション



1. 第1井戸跡陶器出土状況



2. 第1井戸跡土質土器出土状況



3. 第1井戸跡陶器出土状況



4. 第2井戸跡曲物出土状況



5. 第2井戸跡木製品出土状況



6. 第2小溝状遺構群灰白色火山灰確認状況



7. 第2小溝状遺構群鍤先痕検出状況



8. 鍤先痕完掘状況

写真10 出土遺物など

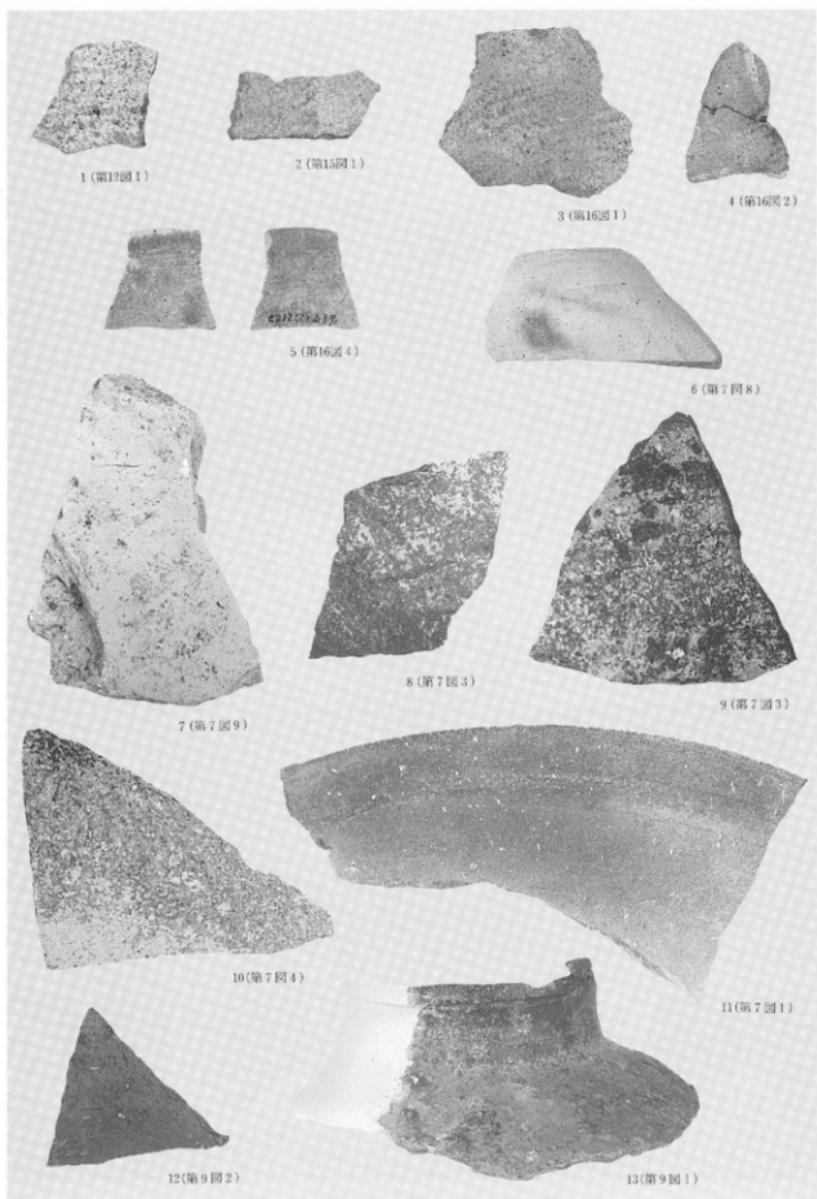


写真11 繩文土器・弥生土器・土師質土器・陶器（1）

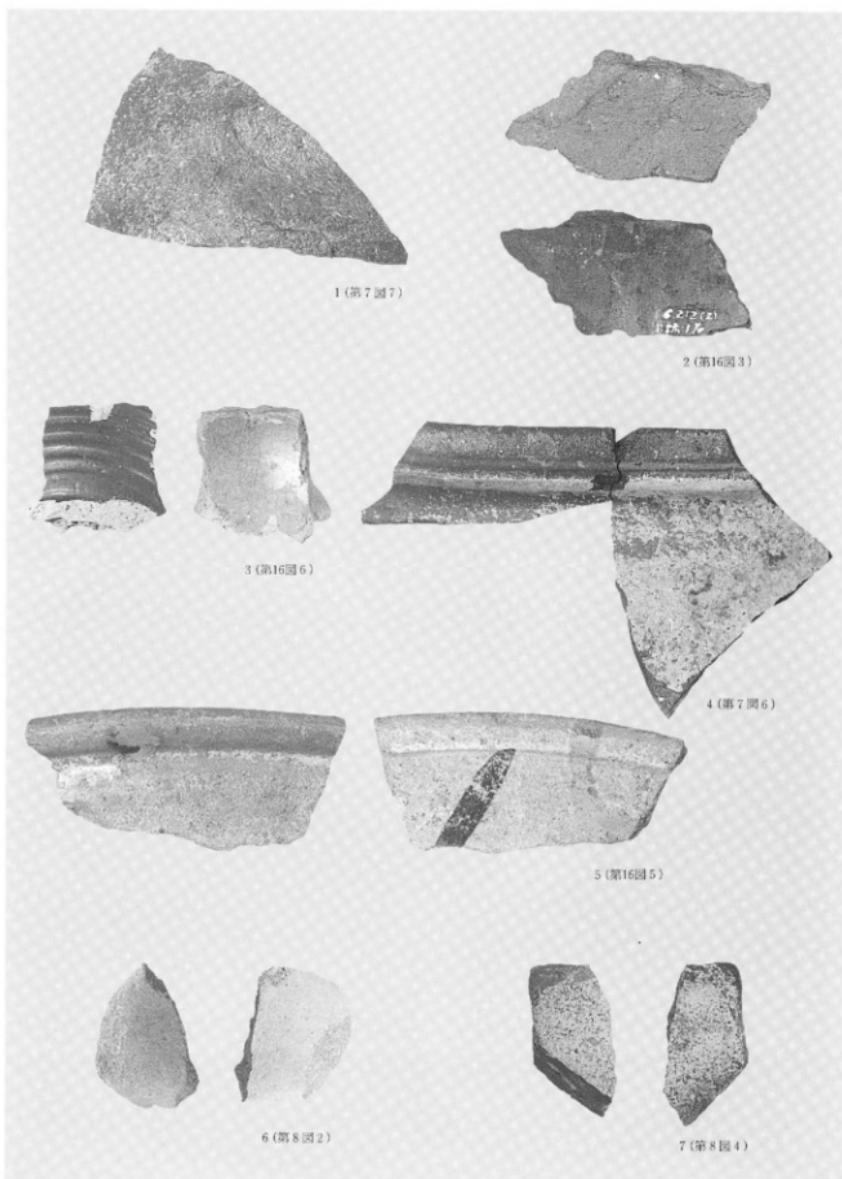


写真12 陶器（2）・石製品（1）（磨面をもつ様）

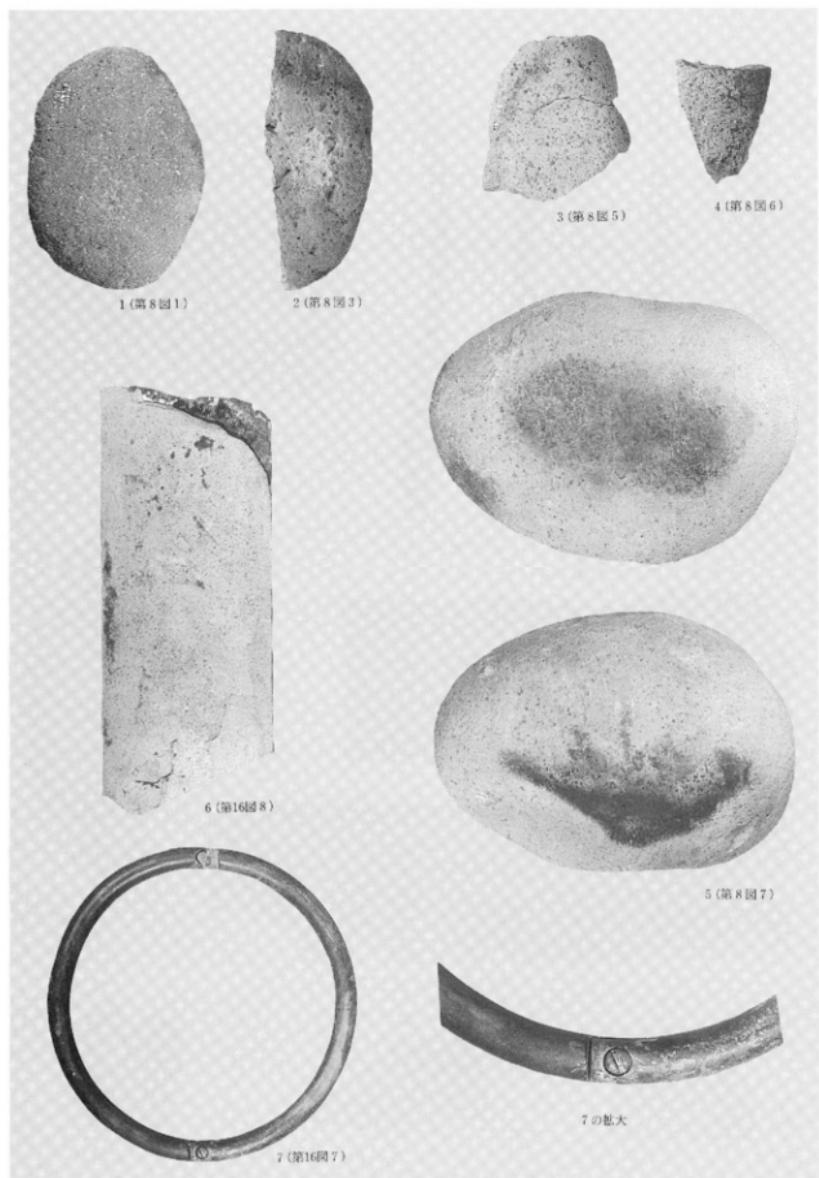


写真13 石製品（2）（磨面をもつ礫・磁石）銅製品



1 (第8図8)

2 (第8図9)



3 (第10図6)



4 (第10図1)



5 (第10図4)



6 (第10図2)



7 (第10図3)



8 (第10図5)

写真14 木製品（つけ木？・曲物など）

報告書抄録

ふりがな	なかだみなみいせき						
書名	中田南遺跡						
副題名	第2次調査報告書						
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第206集						
編著者名	三塚 靖・太田利夫						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL 022-214-8893~4						
発行年月日	1995年7月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
中田南遺跡	宮城県仙台市太白区 中田七丁目225-1外	041009	38° 01272	140° 11' 52' 32"	1994.12.01 5 1994.12.22	210	宅地造成に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中田南遺跡	集落跡 墓跡	平安 ・ 中世	島跡(平安) 井戸跡・溝跡(中世)	縄文土器片・弥生 土器片・陶器片・ 木製品・石器・表面をもつ様・銅製 品			

仙台市文化財調査報告書第206集

中田南遺跡

— 第2次調査報告書 —

平成7年7月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷  東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL263-1166

